

若狭町熊川宿倉見屋荻野家 住宅の調査

はじめに 奈良文化財研究所では、2010年度に若狭町（福井県）からの受託事業として、若狭町熊川宿（重要伝統的建造物群保存地区）に所在する倉見屋荻野家住宅について、その建築的特徴・価値・破損状況・保存活用に関して調査をおこなった。本稿では、その調査について報告する。

荻野家住宅の概要 荻野家住宅が所在する熊川宿は、若狭湾と京都を結ぶ若狭街道（鯖街道）における、若狭の出入口にあたる宿で、物資の人馬継立によって盛況を呈した。荻野家は屋号を「倉見屋」と称し、人馬継立の間屋として成功をおさめた有力商家である。

荻野家住宅は、若狭街道に南面し、短冊状の敷地を背後に流れる北川まで延ばす（現状は北川に沿って国道303号が通る）。街道側正面の構えは、平入の主屋・付属屋・街道に妻を向ける荷蔵によって構成され、屋根の平と妻が入り混じる熊川宿特有の景観の一部を担っている。その中で、荷蔵に開けられた丸窓は、当家のシンボルとなっている。

付属屋は敷地を縦貫する動線の街道側入口であり、もとは吹放ちで、石畳が敷かれる空間であった。この石畳は現在床下に現存し、動線を形作る石組溝や石段は入念に施工されている。正面荷蔵（表荷蔵）の背後には、一回り大きい荷蔵（裏荷蔵）が連なる。これら荷蔵は、良質な材を取り寄せたものというよりは、商売における実用を重視した造りといえる。出入口土間床に埋め込まれた踏み石が、その商売における出入りの多さを物語る。この商売向けの荷蔵に対して、富の象徴としての蔵が、



図43 荻野家住宅正面外観

主屋背後中庭に面して位置する文庫蔵である。海鼠壁・厚い塗籠の観音扉・極太の曲がり梁など、荷蔵とは明確に異なる特徴を持っている。

その他、座敷便所や井戸屋が、主屋と文庫蔵とともに中庭を取り囲むが、これは熊川宿では定石的な配置である。便所としては、座敷便所の他に文庫蔵に付設された建物に2ヵ所所有り、客人、家人、人夫使用人などで使い分けがなされた。

建築年代を示す史料としては、主屋について文化7年（1810）「普請材木入用帳」、文化8年（1811）「いゑ立ふ志ん見舞覚帳」、明治2年（1869）家相図、明治6年（1873）文庫蔵棟札が現存する。明治2年の家相図によれば、表荷蔵・裏荷蔵・付属屋などが既存していたことがわかる。この他、問屋や生業に関わる史料を豊富に所有している。

熊川宿における位置付け 熊川宿では、平入の主屋・付属屋・街道に妻を向ける荷蔵、以上によって構成される表構えは、中ノ町に他に2軒確認でき、問屋建築として一つの定型である。その中で荻野家住宅は、表構えのみならず、石畳や複数の土蔵など、奥行方向にも設備や建物が、問屋としての権勢を示す良好な状態で現存する。

主屋の間取りは、居室部分が2列5室で構成される。熊川宿の問屋の主屋は2列5室以上で、1階正面を土塗戸で防火対策とするのも、この規模より大きいものに限られる¹⁾。また、荻野家住宅が該当する「2列5室整形ザシキーオイエ境閉鎖型」に、建築年代が古いものが多い。したがって、荻野家住宅は問屋建築として古式かつ基本形式であり、類似する型式はその応用型であるといえる。

福井県内の町家建築として 福井県内において文化財指定がなされ、保存措置を受けている民家は、農家建築が大半を占め、町家建築はわずかである。数少ない町家建築の例としては、旧京藤甚五郎家住宅が県指定文化財となっている。旧京藤家住宅は、北陸街道の宿場として栄えた越前地方、旧今庄町（南越前町）に所在する。大屋根より上に飛び出す卯建が特徴的で、軒裏の塗籠、土塗戸によって防火対策に重点を置く点は、荻野家住宅と類似する。しかし、農家建築において、民家形式が若狭型と越前型に分類されているように、町家建築でも地域差が認められると考えられている。袖壁卯建の形式の違いはその一つであろう²⁾。越前では袖壁卯建の先端束が、

下端腕木に載る（差す）のに対して、若狭では先端東に下端腕木のほうを差す。形状も越前で横幅が広いのに対して、若狭では縦長であるなど、明確な違いがある。

現在では福井県内でも、登録文化財の町家建築も増えつつある。これらは、歴史的景観に寄与するその外観が良好に保持されているものの、内部は生業の変化により改造が多く、旧規の間取りなどが不明瞭なものが多い。それでも、痕跡調査で間取りなどが復原できる可能性が高いので、若狭と越前の町家建築における地域差は、今後の研究の進展に期待される。

それでも、荻野家住宅と旧京藤家住宅は、建築当初の構成を良好に残す町家建築であることは間違いなく、若狭と越前を代表する町家建築と評価できる。

破損状況 今回、破損状況の調査をおこなったことにより、現存建物は解体修理が必要な時期にあると判断した。建具の開け閉めに不都合があるのみならず、軸組の不同沈下・傾斜が視認できるほどである。また、軸組の折れにともなって、壁も屈曲しているという危険な箇所も確認された。付属建物においても、土壁の剥落や雨漏りなどにより、痛みが進行していることが確認された。応急的な処置は施されているものの、一時的な抵抗としか言えず、外観上もその価値を損ねており、根本的な対策が必要である。

当地域は、多雪地帯でもあるため、積雪荷重や地上付近の長期多湿環境に対して、保存につながる措置を講じる必要がある。

保存活用 伝建地区選定以来、熊川宿は伝統的建造物の保護とともに、まちづくりの一環として歴史環境を活かした整備に努めてきた。これまでに、熊川番所復元建物、旧熊川村役場を利用した資料館、旧逸見勘兵衛家を活用した宿泊施設や現代住居としてのモデルハウスなどが整備されている。

このような状況下で、荻野家住宅は歴史的民家（町家）建築として、建築当初の形に即した整備をおこない、公開施設として位置付けることが相応しいと判断した。その理由は、

- ①現在の熊川宿内において、歴史的町家建築の本来の姿を公開する施設が存在しないこと。
- ②熊川宿内で最古の建築であり、さらに、現在のところ福井県内で最古の町家建築であること。

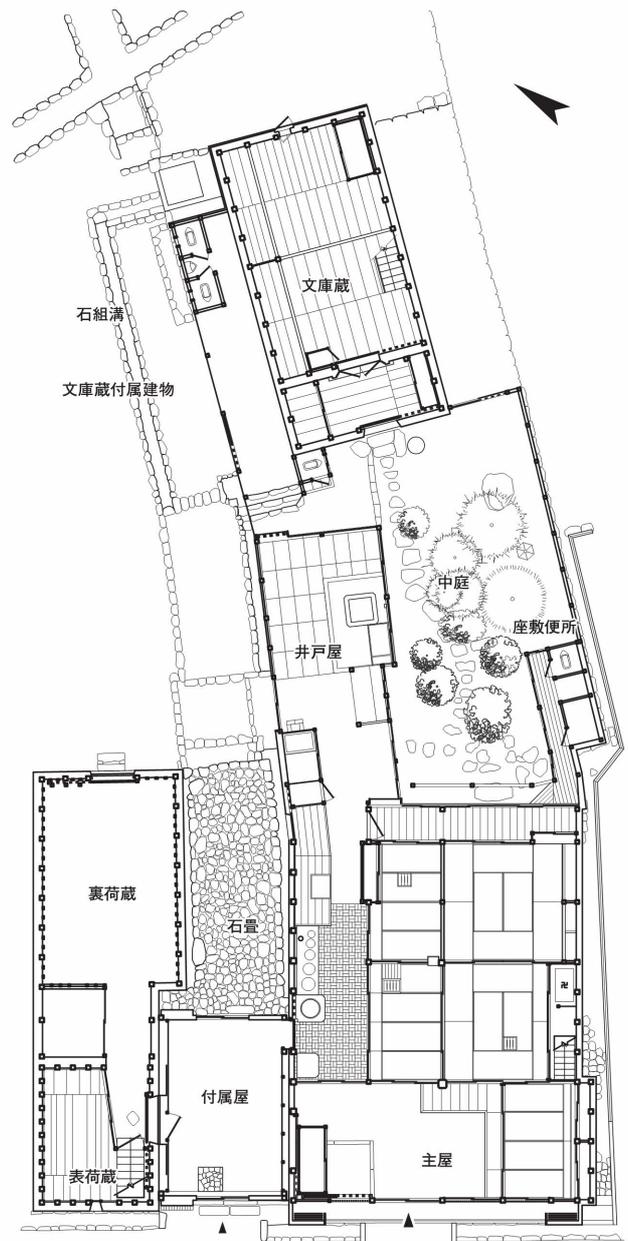


図44 荻野家住宅1階平面図

- ③主屋の改造が少なく、かつ可逆性が高いこと。
- ④熊川宿の特色である問屋建築として、建物・設備が状態良く現存すること。

以上である。この整備によって、熊川宿の歴史的建造物を活かしたまちづくりにおける欠落点を補いながら、他施設と連携しつつ、重要な役割を果たすことが期待される。

(黒坂貴裕)

注

- 1) 上中町『若狭街道の宿場熊川』1982。
- 2) 福井県『福井県史・資料編14』1989。